No.158
公民館だより
平成28年11月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

在職十年を振り返る（九）

由良地区公民館長　枝川隆亮

◎平成二十六（二〇一四）年

江戸時代後期（一七〇〇年ごろ）から明治二十年頃まで、丹後由良の人々の多くは北前船と呼ばれる船に乗船し日本海を航行し出船では、米・大豆・小豆・胡麻・辛子などを積み、北は利尻、小樽、本州では能代、秋田、酒田などに寄港し、丹後の産物を売り、また各地の特産品を買う商売で巨額の利益を蓄え、千軒長者の村と呼ばれていました。

由良村は－略－勿論売船その数百三十艘に及べり（中略）他国は知らず丹の後州においては由良を欺く繁盛の湊また有るべからず云々－

享保十六年（一七三一）の「加佐郡寺社町在旧起」

一五年ほど前から北前船それぞれの寄港地の行政（市）が持ち回りで広域連携を目的として「北前船寄港地フォーラム」が開催されてきました。

宮津市も今年から参加することになり「第一五回北前船寄港地フォーラムｉｎ宮津・京都」が開催されることになりました。

全国から二〇〇名の参加の方々へのおもてなしをする為、実行委員会に数回わたりに参加、協力をしてきました。

由良北前船資料館にも来訪されることになり、絵馬の展示を原寸大で展示することに決定、金毘羅神社・照国稲荷神社・玉司稲荷神社で展示していた絵馬計４３枚のうち、程度の良い六枚を日展入選者に模写を依頼、またその他は写真でデジタルに変換、印刷業者に依頼しました。

その他内部の整備や陳列などに忙しく作業を進めてきました。

作業がほぼ完了する時期になり来訪中止が決定、今までの苦労が台無しになり、無念さに、悔しい思いをしたことが蘇ってきます。

なお、これらの絵馬は北前船資料館に展示しております。

◎八月一七日（日）

山形庄内由良の方々が、丹後由良を訪問。

近畿北部はこの日は前日からの記録的な豪雨の影響で、高速道路は一部閉鎖、到着時間が大幅に遅れましたが、「はまの子体育館」での歓迎会は由良の児童たちが「奉納太鼓」を披露しました。

国民宿舎での懇親会は、庄内由良小学校の児童たちが「花笠音頭」を披露、それぞれの由良の自慢話で大いに盛り上がりました。翌日は宮津市役所を表敬訪問され、両地方の友好の輪が一層深まりました。

その後、橋立へ移動、学童は自転車で松並木を散策、磯清水や岩見重太郎仇討ち場を見学後、汽船乗り場で合流、籠神社へ参拝後昼食、別れを惜しみつつ庄内由良の方々は京都市観光へ移動しました。

昭和五十三（一九七八）年、庄内由良から佐藤儀助さん達が蜂子王子の伝説の縁を求めて丹後由良を訪問されました。

これが両由良地区の交流の発端となりました。

歓迎会で庄内由良小学校の佐藤空凱さんが「二つの地域のつながりを、地元の人たちにも広げたい」と述べられたように、私たちも両地方の発展を望みつつ、親善友好に努めようと考えています。

（以下次号）

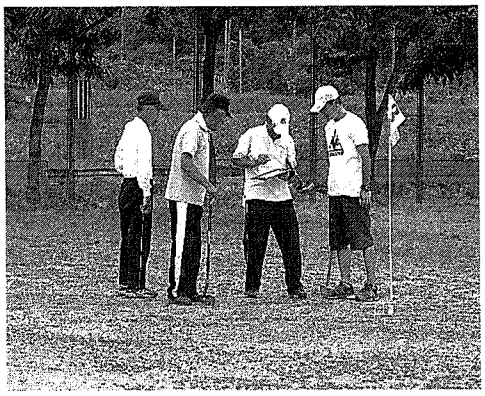
行事報告

主事　千坂幸雄

◎グラウンドゴルフ大会（個人戦）

六月十二日（日）午後二時から午後四時まで
会場…はまの子グラウンド
男子十四名　女子十二名
大会役員二名　計二十八名
午後一時から分館長を中心にコースの準備と受付を行いました。天候は曇り、熱心な方はマイステック、マイボール持参です。八ホールを二回行い、合計で競いました。

［結果］敬称略
男子の部
優　勝…糸井治孝
準優勝…野村孝行
第三位…中西　忍
女子の部
優　勝…中西　巴
準優勝…才本憲子
第三位…川﨑美幸



◎四部対抗バレーボール大会

七月十七日（日）午前八時三十分から午後三時三十分まで
会場…はまの子体育館
選手…男子五十四名
　　女子四十一名
役員…二十九名
由良自治連合会共催
ソフトバレーボールを使用してリーグ戦を行いました。

［結果］
男子の部
優　勝…二部（宮本）
準優勝…三部（浜野路）
第三位…一部（脇）
第四位…四部（港・下石浦・上石浦）
女子の部
優　勝…三部（浜野路）
準優勝…二部（宮本）
第三位…四部（港・下石浦・上石浦）
第四位…一部（脇）

男子の部においては、二部の総合力が若手バレーボール経験者を擁する三部に勝りました。各部で力の差はなく、練習量の多いチームが有利です。

女子の部においては、ベテランと若手の力がうまく発揮できた三部が優勝しました。女子も力の差がなく、練習の質の向上を図ったチームが勝つことになります。

女子は、クラブで毎週練習しています。男子も定期的に練習ができればいいのですが。

◎四部対抗ソフトボール大会

八月十四日（日）午前八時二十分から十二時三十分まで
会場…はまの子グラウンド
天候晴れ、気温三十二度

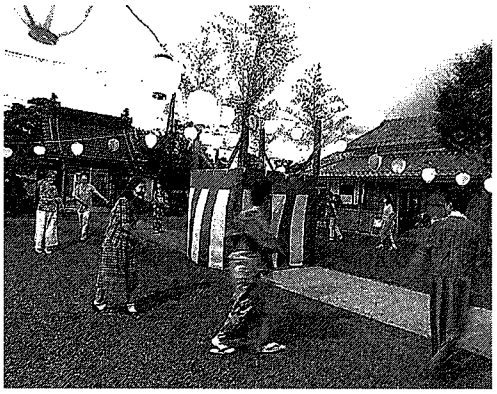
里帰りの若者が多く参加し、久しぶりに由良が若者で賑やかになった日でした。由良は昔から野球が盛んで、今の若者も少年野球を経験し、中学校で野球部だった人が多くいます。ファインプレーも多くみられ、応援に来られた家族の人たちを含めて、地区民の交流ができ、有意義なひと時を過ごすことができました。

［結果］
優　勝…三部（浜野路）
準優勝…四部（港・下石浦・上石浦）
第三位…一部（脇）
第四位…二部（宮本）

◎盆踊り大会

八月二十一日（日）午後六時

四十五分から午後八時まで
会場…松原寺
約四十名参加



えいへいや踊り保存会の皆様の協力を得て由良小唄とえいへいや踊りを踊りました。参加者数が気になっていましたが、昨年よりも少し多かったのではないでしょうか。男性が四名踊りに参加できました。来年は、運動会がある予定です。小学生と中学生が皆さん踊りに参加し、親・祖父母の方が加われば、家族団らんの賑やかな盆踊りになるでしょう。

◎パソコン講座

講師に吉野健吉氏（宮津調停協会会長）セバーグ由良在住を迎えて五回講座を開いています。受講者は八名、一回から四回まで行った内容を簡単に紹介します。

○第一回パソコン講座
九月四日（日）午後七時～
場所…由良地区公民館
講習内容
ワードを使ってポスター作り（ワードアート　写真の貼り付け　その他）

○第二回パソコン講座
九月十一日（日）午後七時～
場所…由良地区公民館
講習内容
ワードを使ってポスター作り（図形の作成　ページ罫線の設定　テーマの適用）

○第三回パソコン講座
九月十八日（日）午後七時～
場所…由良地区公民館
講習内容
名刺の作成（市販の名刺作成用紙に対応したラベル作成ソフトを使って作成　ワードを使って作成）

○第四回パソコン講座
十月十六日（日）午後七時～
場所…由良地区公民館
講習内容
エクセル（エクセルでできること　並び替え　数式の使い方）
第五回は十一月十三日（日）午後七時からの予定です。

◎由良地区健康広場ウォーキング

○六月ウォーキング
六月十二日（日）
午前八時三十分～
参加者数…男子三名
女子六名
計九名
地区内ウォーキング（由良浜コース）
歩数…四〇二二歩
歩行距離…三、一三ｋｍ
天候は曇り、蒸し暑さを感じる日でした。浜では、釣り客が何名かいました。海水浴シーズンを目前にして、浜茶屋の準備や砂浜の造成が進められていました。脇の稲荷神社で休憩をとり、中道を通って由良地区公民館に戻ってきました。

○七月ウォーキング
七月三日（日）午前九時～
参加者数…男子三名
女子〇名
計三名
地区内ウォーキング（森が鼻コース）
天候曇り、蒸し暑い日になりました。三名の他に二名八時三十分から歩いておられる方がいました。
歩数…三六五四歩
歩行距離…二、七八ｋｍ
汗がでました。

○八月ウォーキング
八月二十八日（日）
午前八時三十分～
参加者数…男子二名
女子五名
計七名

地区内ウォーキング（由良浜コース）
歩数…三四六三歩
歩行距離…二、八九ｋｍ
浜に下りて中央海水浴場へ、由良神社と如意寺を参拝してグラウンドの裏を通り、由良地区公民館に帰ってきました。天候は曇り、数日前からの雨で涼しく、歩きやすかったのではないでしょうか。

○九月ウォーキング
九月十八日（日）
午前九時～午前十一時三十分
参加者数…男子五名
女子五名
計十名

ウォーキングと体力測定
しばらくウォーキングをした後、体力測定をはまの子体育館で行いました。体力測定は、市健康増進係の横谷氏に講師をお願いし、森田美砂子健康づくり運動推進地域リーダーが指導を補佐しました。参加人数は前回よりも少ない状況でしたが、参加された方は、しっかり体力測定をしていただき、有意義なひと時を過ごすことができました。

○十月ウォーキング
十月十六日（日）午前八時三十分～午後一時四十五分
参加者数…男子六名
女子二十一名
計二十七名

天橋立松並木ウォーキング
天候晴れ、午前八時三十分、丹後由良駅に集合、九時過ぎの列車で出発、栗田駅で二名合流、二十七名の参加で賑やかになりました。
天橋立駅で館長から説明を受けてウォーキング開始、各自のペースで松並木をウォークし、江尻のスーパーでおにぎりとお茶を配っていただいて思い思いのところでいただきました。運動の後のおにぎりは大変おいしかったです。
多くの方が一の宮籠神社を参拝しました。数人の方はリフトで笠松公園まで行きました。帰りの松並木では着物祭をしていて大変にぎわっていましたし、外国人の方が多く観光に来られていたのにはびっくりしました。
おみやげを買って、午後一時十五分発の列車で帰ってきました。
本日の歩行　約一二〇〇〇歩
約一〇ｋｍ

◎グラウンド整備
七月二十四日（ターゲットバードゴルフ協会　十一名参加）
七月三十一日（自治会　松寿会他　十三名参加）
ターゲットバードゴルフ協会の方には常にグラウンド整備をしていただいています。おかげでいつもグラウンドが美しく保たれていますことに感謝申し上げます。

◎第十二回宮津ロータリークラブ杯争奪少年少女剣道大会
九月二十五日（日）
会場　吉津小学校体育館
団体小学生の部において由良剣道教室が優勝しました。
メンバー
先鋒　中西陽奈
中堅　柴山彩香
大将　長谷川陽七海
由良地区公民館の玄関を入ったところに優勝盾と賞状が飾ってあります。

由良みかんとオリーブ

栗田中学校　教頭　小坂卓男

青空の下、碧の海が果てしない広がりを見せる奈具海岸を走り抜けると、今年の夏も、多くの海水浴の人々が白波と遊んでいる光景が、目に映ってくる……そんな夏もいつしか過ぎ去り、平成二十八年も閑かな秋を迎えました。とは言っても、今年は台風情報に振り回される日々が続いていますが。しかし、ふと気付くと、至る所で〝由良みかん〟が、はっきりと緑やオレンジの自己主張をしていました。私も幾度となくみかん狩り等でお世話になりましたが、由良といえば〝由良みかん〟、宮津市が誇る特産品です。

みかんは、中国では柑子と表現されていますが、蜜のように甘い柑子ということで、日本では蜜柑と表現します。〝温州（おんしゅう）みかん〟の温州は中国の地名で、原産地は中国と思いがちですが、実は日本（鹿児島）が原産地です。五月頃、白い可愛らしい花を咲かせるみかんの花言葉は、「清純」「親愛」「花嫁の喜び」で、清らかなイメージです。なぜか、十一月二十三日の誕生花とも記されています。

みかんと言えば、家族団らん、こたつに入ってみかんを食べるお正月の一コマを思い浮かべる人は多いのではないでしょうか。それほど私たちの身近にある存在で、生活の中に息づいています。「みかんにはビタミンCがようけ入っとるで、風邪ひかんように食べとけ」と、よく祖母が言っていたのを想い出します。焼き蜜柑にする人もいるそうです。

消費者側からすると蜜柑のイメージは、このように家族の温もりを感じさせますが、生産者側からすると、蜜柑作りはとても重労働で、高齢化傾向の中、その後継者の問題も含め、由良みかんの今後についてはいろいろな課題があるようですが、いつまでも由良みかんが身近にあって欲しいと願っています。

二学期に入って、中学校に一本の電話が入ってきました。それは、「由良オリーブを育てる会」の方からでした。是非中学生に、オリーブの実の摘み取り体験を、というお誘いでした。由良でオリーブ摘みができるん？オリーブの実ってどんなの？少しなじめない言葉に即答はできませんでした。

オリーブといえば、地中海やエーゲ海が頭に浮かぶ。日本では小豆島でしょうか。調べていくと、平成二十五年に『由良オリーブを育てる会』が発足、約九百本の木が育てられ、京都由良オリーブ茶やオリーブ実の新漬が発売されているという。

近々オリーブオイルも販売化されるそうだ。まさに由良（宮津市）の新しい特産品といえる。

オリーブの花は見たことはないが、モクセイ科ということで、キンモクセイの白い花といったところか。その花言葉は、「平和」「やすらぎ」「知恵」「勝利」。大洪水を収めるために鳩が持ち帰ったのがオリーブ。この「ノアの方舟」の話に由来して、オリーブは平和の象徴とされ、国連の旗にも使われています。また、ポセイドンとアテネの覇権争いで、最も役に立つ物という課題に、食用や薬効のある実が採れるオリーブを植えたアテネが支持を得たというギリシア神話から「知恵」「勝利」の花言葉となったそうです。古代オリンピックでは優勝者にオリーブで作られた冠が贈られ、現在でもマラソン優勝者にはこの冠が

贈られています。

オリーブ作りは、みかん作りと共通点が多いそうですが、重労働という点では、オリーブの方が軽くなるそうです。これからの宮津を、由良を何で活性化させるか、みんなで「知恵」を出し合い、懸命に取り組んでおられる「由良オリーブを育てる会」の皆さんの懸命な姿は、この地域で生まれ育っている生徒たちにとって、とても尊いものです。これから何十年先、オリーブに携わっている方々にオリーブの冠が贈られる、そんな日が来て欲しいです。

十一月十四日、一年生が体験することに決まりました。単なるオリーブの実を摘み取る体験で終わることなく、将来、地域社会を担っていくという視点を持って体験して欲しいです。

由良（宮津市）にみかんあり、オリーブあり。

ソフトボール大会に参加して

船野　大

真夏のソフトボール大会、天候にも恵まれ絶好の大会日和となりました。

学生のころはクラブに明け暮れていたので、地区の行事に参加することもなく過ごしてきました。いずれにしても参加してみることに意味があると挑戦することにしました。

四部対抗の運動会・バレーボール・ソフトボール大会など、少子高齢化の進む中、どこまで続けられるんだろう？という思いはありますが、他の地区の方と年齢の上下を問わずコミュニケーションができ、とてもいい交流の場であり、それが由良の活性化になっているとおもいます。

基本的にグラウンドには実際にプレーできる人たちだけなので、プレーに参加できなくても応援団としてチームの一員のような形で参加があればいいのになって思いました。試合はプレーするだけでなく見るだけでも楽しいですよ。ぜひ一度見に来てください。

ソフトボール大会を通じ、参加者一丸となって取り組むことができ、共に喜びを分かち合うことで、絆・連帯を深めることが出来たと思います。なによりも、皆が楽しんでいたので、今年のいい思い出の一つになったと思います。これからも、いいコミュニティの輪が広がることを期待したいと思います。

そして毎年、大会進行を支えてくださる人々のありがたさも再認識できる良い機会でした。

ありがとうございました。

平成27年度 宮津市人権標語入賞作品

いじめする　自分も相手も　傷だらけ　（中学１年生）

大丈夫　その一言を　届けたい　（中学２年生）

十人十色　みんな違って　みんないい　（中学３年生）

消防団活動の現状と入団のお願い

宮津市消防団　由良分団　分団長　岡本康一

由良地区の皆様には、日頃より宮津市消防団由良分団にたいしまして、ご支援ご協力賜り感謝申し上げます。

さて、消防団は地域防災の要として全国で組織されており、現在、由良分団は団員数三八名、分団本部、第一部、第二部、第三部で構成され活動しています。当地区に限ったことではありませんが、団員確保が深刻な問題となっており、由良分団も約十年前、地域の方々のご理解のもと、実践部が四コ部から三コ部となりました。しかし、現在の三コ部体制も活動が大変厳しい状態となっており、さらなる再編も視野に入れなくてはならなくなっています。

消防団員は日頃、消火活動の訓練を行い、万が一の火災等に備えておりますが、平日の日中有事が発生した場合、由良にいる団員が数名であるのが現実です。『私たちの地域は私たちで守る』という意識の元、消防団に入団して頂ける方を心よりお待ちしております。

また、消防団の活動の中に、隔年ごと実施される、消防操法大会があります。これは、模範的な消防ポンプ操法を実施し、消防団員の消防技能の向上と士気の高揚を図り、もって消防活動の充実に寄与することを目的とされており、宮津市消防団は府内でも屈指の実力を持ち、近年三度の全国大会出場もしております。由良分団においては団員数の少ない中、全コ部が出場しレベルの高い市の大会において近年は入賞の常連分団となり、今年六月の大会では、小型ポンプの部において準優勝と三位入賞を果たしています。

団員は皆、仕事を終えてからの夜間、又は休日に、訓練等真面目に真剣に取り組んでいます。私自身、二十代半ばで入団しましたが、当時は訓練への積極的な参加はできていませんでした。しかし、訓練を重ね、年を追うごとに、共に汗をかき苦労している仲間との深い絆、団結力を得ることが出来ました。これは他の団員も同じであると思います。そして、由良に住みながら消防に入ってなければ交わる機会があまりなかった先輩や後輩とも多数親しくさせてもらう事が出来ています。

消防団は辛い事ばかりでなく、素晴らしい仲間とも出会え、さらに由良での生活をより有意義にさせてくれるものです。

団員数減少の中、消防団は火災発生時の初期消火はもちろん、予防、啓発活動、そして、豪雨時等の水防団としての働きと多肢にわたっています。引き続き由良にお住まいの青年の皆様へ入団のお誘いをさせて頂きますが、是非、消防団をご理解頂き地域防災の要として共に活動していきましょう。

最後になりましたが、皆さん一人一人が火の取り扱いには十分注意して頂き、防災を心がけ、火災のない由良となりますよう、よろしくお願いいたします。

初参加の四部対抗バレーボール大会

古橋彩加

七月の蒸し暑い中で行われた四部対抗バレーボール大会。私は今回初めて参加させて頂きました。バレーボール大会というと、私が幼い頃に母の応援に行っていたのを思い出します。そんなバレーボール大会だからこそ、母ではなく私に声をかけて頂いたことに、少し戸惑いもありましたが、あの頃の母の年齢に自分も近づいてきたんだなと感じました。

声をかけて頂き、とても嬉しかったのですが、なんせ私は運動音痴。バレーボールなんて学生の頃の体育の授業でしか経験がなく苦手なので、戦力になれず、周りの方の足を引っ張るだけではないかと不安でした。ですが、実際に試合が始まると、チームの皆さんにやさしく声をかけて頂き、フォローもして頂けたので、緊張せずに、楽しくバレーボールをすることができました。

試合は、どの試合もかなり良い勝負で接戦でした。ヒヤヒヤするシーンが多かったです。特に印象に残っているのが、私たち三部が相手チームにセットポイントを取られていて、後がない状態で私にサーブの順番が回ってくることが多く、本当にあの時はプレッシャーとの戦いでした。そんな時にチームの皆さんに声をかけて頂き、サーブも落ち着いて打てたので、ミスをすることもなく、そこから挽回することもできたので、少しはチームに貢献できたかなと思い、一安心でした。又、私にもアタックを打てるようにボールを回してもらい、ポイントにはならなくってもアタックが打てたことも楽しく嬉しかった思い出の一つです

他の部の皆さんもとても上手で、チームワークもよく、見ごたえがあり、みんなで歓声を上げる場面もあり、終始楽しかったです。

男子もかなり接戦で、必死に応援しました。始めの方こそ、みんな体が固かったですが、試合を重ねる毎に上達していくのが目に見え、ファインプレーも飛び出し、思わず見入ってしまうほど、見ていて楽しかったです。

実は、私が地区行事に参加するのは、祭りに参加していた中学生の時以来だったので、今回のバレーボール大会で初めて話をさせていただく方もおられ、そういった方と一緒にバレーボールをすることによってお話をするきっかけが生まれた事が一番嬉しかったです。又、このバレーボール大会は主人が初めて参加した由良の地区行事でしたが、周りの方々にたくさん声をかけて頂き、とても楽しく過ごせたようでした。感謝しております。

本当に久しぶりに身体を動かすことができ、とても楽しかったです。改めて身体を動かすことの大切さや楽しさを感じることができ、バレーボール大会をきっかけに、少しですがスポーツをするようになりました。地域の方々とこうして楽しく身体を動かすことは、とても大事だと感じました。これからも、この地区行事がずっと続いていってほしいと思います。いつか自分の娘と一緒に出られる日が来るといいなと思います。

最後になりましたが、役員の方々には大変お世話になりました。とても楽しい一日を過ごせましたし、参加することができてとても嬉しかったです。ありがとうございました。

またいつか、声をかけて頂ける日を楽しみにしています。

由良山宝珠院如意寺と護寺会

如意寺護持会代表　藤井　忠

秋晴の候、皆様にはご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

如意寺護寺会について、日頃、格別のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、この度如意寺についての原稿依頼をうけて、良くご存知の皆様にどのように紹介すればと迷いながら概要と近況をお伝えします。

まず、**如意寺の歴史**ですが、奈良時代、推古二三年（六一五年）用明天皇の第三皇子、麻呂子親王が建立したという伝承である。

一四〇〇年、由良山宝珠院長福寺であった。寛永一七年、約三八〇年前、現在の土地に移る。享保五年、約二五〇年前、（舞鶴）牧野氏の二代目因幡守の所望により、長福の寺号を幼君の名前に差し上げる代わりに如意の二号を賜り、由良山宝珠院如意寺となる。

如意寺の概要

建物は山門、護摩堂、地蔵堂、庫裡で、如意寺の護摩堂には本尊である薬師如来そして脇侍として日光菩薩、月光菩薩が配され、他に大日如来、阿弥陀仏、観音菩薩等、多くの仏像を配しています。

又、地蔵堂には金焼地蔵菩薩（身代わり地蔵）坐像が安置され、胎内墨書に「巧匠（梵字アン）阿弥陀仏」とあり、快慶作は明らかである、昭和六三年京都府指定文化財として認定される。

他に、お大師さんの道があります。四国八十八箇所霊場の仏様が西山・東山に祀られてあり、巡礼が出来ます、又、由良岳頂上に虚空蔵菩薩がお祀りしてある。如意寺の奥の院であり、昔から由良岳を「虚空蔵山」と呼んで親しんできた。これは如意寺の奥の院として山頂に虚空蔵菩薩が祀られているからである。尚、由良神社の裏には、由良岳頂上の虚空蔵菩薩を拝む為の石台が有ります、是非お参りください。

如意寺の行事

四月上旬　お大師さん道造り
四月二一日　正御影供
八月二三日　身代わり地蔵菩薩例祭
二月一一日　節分会

護寺会組織状況

護寺会会員戸数　三八二戸
住　職　一名
幹事責任役員　六名
責任役員　七名
相談役　一名

如意寺近況

二〇一五年七月
ちちんぷいぷいの撮影で、身代わり地蔵菩薩紹介
二〇一五年一二月
出羽三山神社宮司　宮野　直生氏身代わり地蔵菩薩お参り
二〇一六年四月十六日
お大師さんの道造り
二〇一六年四月二一日
正御影供
二〇一六年八月二三日
身代わり地蔵菩薩例祭
二〇一六年九月一六日
身代わり地蔵菩薩調査（奈良国立博物館山口博士他四名）

調査に当たり、尋ねたところ、管理状態はいいとのこと、又、三時間に及ぶ調査が行われ、身代わり地蔵菩薩の全てを見ることが出来たことと、今後の管理について注意点を教わり、大変勉強になった。

＊撮影された方、お参りされた方、調査された方、皆様まさに宝物と賞賛される。私もまさに由良の宝物と思います。大切にしたい。

＊他に、身代わり地蔵菩薩に病気回復等のお礼に参られる方が多く、先日も奈良からお礼に参られました。

如意寺護寺会会員の皆様、今後ともご協力宜しくお願いします。

ふれあい「汗ばんだ竹ぼうきを持って」

小西　衛

この汗ばんだ竹ぼうきを持って、業者からもらった、黒い椅子に腰を下ろせば、誰かが聞いてきた。「どうしてそんなに、由良神社を掃除しているの?」すると僕は、リハビリなんですよ。それに、「Yさんの草原を美草にしている姿を見ていて、それをマネた時に、頭の整理整頓ができたからですよ。」と答えればいいのに、僕の答えはいつも違っている。いつも体裁ばかりつけて答えている。

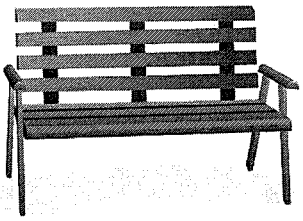
Hさんからもらった汗ばんだ竹ぼうきを置いて、黒い椅子に腰を下ろせば、誰かが聞いてきた。「どうしてそんなに、由良駅前通りも掃除しているの?」すると僕は、コミュニティですよ。「地域参加型ボランティア」だって、由良駅周辺やはまの子グランド周辺、それに、旧由良小学校・幼稚園周辺を丁寧に掃除されている人々や「物心がついた時には、もう桜の木の下のお掃除をさせられていたわ。」と宮津市長感謝状ものNさんも丁寧にお掃除していると言えばいいのに、いつも僕の答えは違っている。いつも体裁ばかりつけて答えている。

僕の心はどうかしている。けれど、そんな事はどうでもよくて、大切な事は、この由良駅前通りが風の街通りになってきたということ。人に言えない悲しみも昔楽しかった友との思い出も風が運んでくれる通りになってきたということ。今が大切だよと、この風は僕に教えてくれる。ほらほら、お馴染みの安寿足湯のマスターが自転車で僕の横を通り過ぎようとしている。「ご苦労さん」「ご苦労さん」と言いながら安寿足湯に向かっている。Yさんの背中は今が大切だよと僕に教えてくれている。それに、働けることは幸せだよと教えてくれている。あらまあ、またまたお馴染みの由良自治連合会長さんも自転車で、しかも右手を挙げながら、僕の横を通り過ぎようとしている。「ご苦労さん」「ご苦労さん」と言いながら石浦に向かって行った。Mさんの背中は僕に、ひらひらした紙飛行機のような都市計画ではなくて、石ころだらけの地面を這うような、心の都市計画をやってのけている姿を僕に教えてくれている。緑のゴミ箱（バケツ）の前を『ふれあう』ように、静かに、静かに、貨物列車のようなゴミ収集車が止まった。

それでは、『ふれあい』というテーマで書いてまいりましたけれども、吉田拓郎の『ふるさと』を読んでいただきながら皆さんとお別れすることにします。

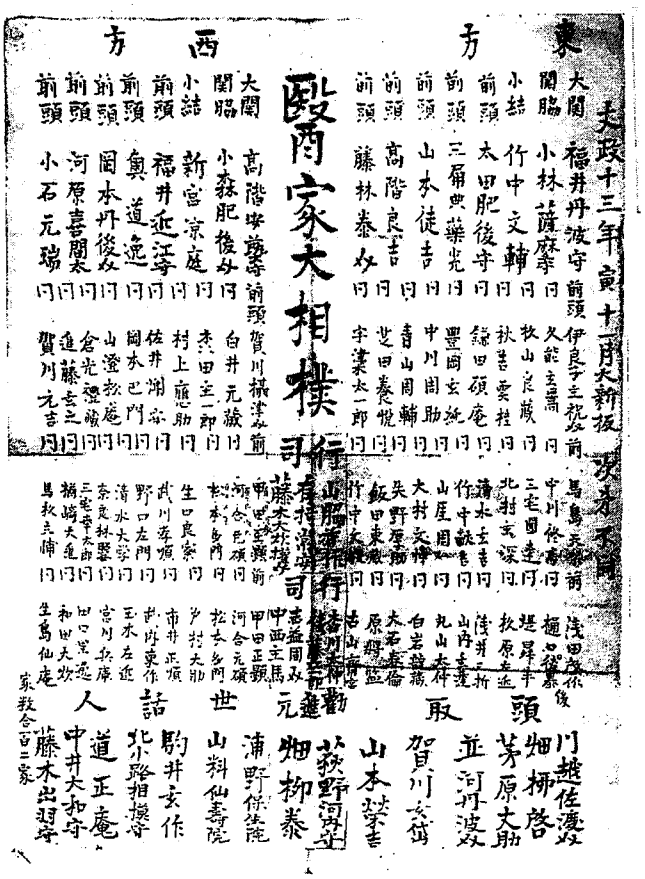
♪オヤジを愛し　おふくろを愛し　兄貴を姉貴を愛しそして自分を愛して　ふるさとが好き
生まれたところが好き　育ててくれた町が好き　そして自分が好きさ　ここは日本だ　僕のふるさと　信じて愛していたい
ここは僕のふるさとだ
♪青い海があり　緑の山があり
川が流れているはずさ　恋人を信じ　友達を信じ　人の心を信じて行くはずさ　そして笑顔を見せて　ここは日本だ　僕のふるさとだ　信じて愛していたい　ここは僕のふるさとだ

ぬくもりのある由良駅前通り
由良浜野路夕月サロンの『ふれあいのイス』にて



『京の蘭方医』新宮涼庭伝

新宮涼輔



医家大相撲（文政13年版）　（若林正治氏蔵）

【京都の蘭学界と涼庭】

この時代の京都の蘭学界の状況と涼庭の地位について記すこととする。文化の初年が京都蘭学界の新旧の交代期である。

文化・文政の交わりは、辻蘭室は、六〇歳代で孤高よく究学の道にいそしんでいた。特異な医家、野呂天然は、文化十年（一八一三年、涼庭二七歳）のとき、京都に出て生象学を唱えた。

新進の※藤林・※※小森・※※※小石の三名は共に三〇歳代、もはや押しも押されもせぬ蘭医学界の中堅として駢馳していた。その評価こそ、なお漢医学の支配していた京都においては、一・二を占めるには至らなかったとはいえ、やがて文政末年には、先に示した**医学番付**のごとく、小森・新宮の関脇・小結をはじめ、東西合して一六名家の中に顔をそろえていた。したがって、その実力からいえば、この四名は京都全医学界の王座に君臨するものと見て差支えない。

涼庭を除く他の三名の活動の頂点は、文政時代にあった。そして、天保五年（一八三四・涼庭四八）三月、野呂天然まず七一歳をもって没し、翌六年一二月、辻蘭室は八〇歳の高齢で没した。蘭室は病の床につくまで蘭書に親しみ、製薬を怠らなかった。さらに、その翌七年には、藤林普山が五六歳で没した。

京都の蘭学界に第二の転機が近づいたことが明らかである。この中にあって、一人涼庭は、天保六年（一八三五・涼庭四九歳）の**泰西疫論**の出版に次いで、翌七年に**窮理外科則**第二篇を刊行するなど、京都の蘭学界の耆宿として活動、諸侯への用達に多忙でありながら、その研究は遅滞なく続けられていた。そして、天保十年（一八三九）には、順正書院を建て、世間的に華々しい活動に入った。天保一四年・涼庭五四歳、には、小森桃塢が六二歳で没し、病弱であった小石元瑞は、かえって六六歳の長寿を保ち、小森の死に遅れること六年、嘉永二年（一八四九・涼庭六三歳）に没した。

一方、新しい活動としては、医学の面では天保九年（一八三八・涼庭五二歳）、豊後の人、日野鼎哉（かなえ）が四二歳で京都に来て開業した。**近世名医伝**の日野鼎哉が来た時の状況を「是より先、新宮涼庭、都下に開業す。医名籍甚、能くその右に出づる者なし。鼎哉の至るに及び、後遂に駕を並

べて斉馳するに至る。」と述べている。この時はまだ、小森・小石元瑞は生存していた。さらに、天保一三年（一八四二・涼庭五三歳）長崎医人、楢林栄建が、高島事件の累を避けるためであろうか、京都に来て日野鼎哉の家に寄寓した。栄達は、三代栄哲（高連）の子で、長崎にあって種痘の輸入に努力した。日野を頼ったのは、種痘の関係からであろうが、入洛後、一時岩倉村に隠れたこともある。後、弟の宗達と連絡し、ついに種痘の業を完成したのであるが、また、しばしば涼庭や船曳卓堂などに招かれ、京津間を往来、患者の診療に立ち会ったという。ただし、涼庭が種痘にどの程度の貢献があったかは明らかでない。弘化四年（一八四七・涼庭六一歳）には、甲斐人、広瀬元恭が二八歳で京都で開業した。**日本医学史**には、元恭が江戸より京都に来て開業した理由を述べた箇所に「京都は寥々として聞ゆるものなし」とし、京都が江戸に比べて著しく劣っていたように述べている。また、**新選洋学年表**では、「当時上国の蘭方大家は、京都に新宮涼庭あり、大阪には緒方洪庵あり。」と述べている。もとより京都の蘭学界全般を推すことは妥当ではないが、幕末における江戸の蘭学は素晴らしいものがあり、大阪では偉材緒方洪庵が適塾にあって、天下に名を轟かせ、門下に多くの俊秀を擁していたから、京とはこれらに比するときは、確かに見劣りしたことも否定できない。しかし、その中にあって、涼庭の名声がいかに大であったかは、以上の記述からも読み取ることができるであろう。天保末年より、弘化・嘉永にわたっては、牛痘の研究と普及が一つの中心課題となり、小石元瑞の子、中蔵もこれに加わった。この頃、全国的には海防が重要な課題であったが、小藩ぞろいの、しかも海防にあまり縁のない山城としては、この方面の発達はあまり見られず、蘭医学界には往時の生気は見られなかった。涼庭は、この時期には医学界においても、また世間的にも最も華やかな名声を得ていたのである。

さらに、医学以外では、銅版画の松田玄々堂がある。言語学の光井道沢は天保一一年（一八四〇・涼庭五四歳）三六歳の若さで京都に出たが、翌年には志を果たさずして若死にした。

【晩年の涼庭】

晩年の涼庭は、すでに述べたように、なお諸侯の用達に奔走していたし、一方、後の章で見るように順正書院を中心として、天下の名士と交わり、その医術においては、小森玄良の没後は京都の蘭医中随一であり、その名声においても、京都有数の人物であった。他の章に関係あるところは、その概要にとどめ、その医技・城崎行きと一族に重点を置き、ほぼ弘化以降一〇年間のことについて述べる。

【順正書院と交遊】

順正書院関係の交遊を年次別に摘記する。

・天保一一年（一八四〇）一一月上旬、篠崎小竹、**順正書院記**を作る。

・天保一二年正月、後藤彬、**順正書院記**を作る

・天保一三年冬、備中の新見侯、順正書院を訪う。

・天保一四年この年、次の人々が**順正書院記**を作った。三月に頼三樹、夏に近藤義制、四月に木山綱、八月に佐藤一斎。この年、涼庭は**上仙石侯、呈風月楼先生**を認めている。一一月と一二月のことである。

・弘化元年（一八四四）春、川田興が、順正書院記を作った。冬に一条相国、久我亜相、上甲礼が順正書院に来た。

・弘化二年、上甲礼が**順正書院**

記を作った。この年、涼庭は三月十五日に城崎温泉に湯治に行った。

・弘化三年、長戸譲が、順正書院記を作った。

・嘉永元年（一八四八）春、川田興が、十月、奥野純が順正書院を訪い、宮沢雉、中島規が詩を送った。

・嘉永二年、綾部侯、宮津侯、出石侯が順正書院を訪ねた。

・嘉永五年、次の人々が**順正書院詩**を作った。斉藤謙、後藤松陰、また、牧輗津藩の平松楽翁・藤堂多門・斎藤拙堂・藤井竹外が順正書院を訪ねた。

【涼庭の医術】

涼庭の医術については、前にも述べたが、それについで、**鬼国先生言行録**に収載されている若干の例をやや過褒に属するものもあるが、とにかく医技の点でも涼庭が非常にすぐれていた一端を示している。かつて涼庭は平塚某の愛妓を診断したとき、鼻筋をしかめて言うには、この人は一年ばかりすれば、頓死するであろうと、半年後、この妓は一度も病むことがなく、歌舞談笑して常と変わることがなかった。一日ある人がこの妓を招いて酒楼で飲み、涼庭を招いて詰問した。「先生にも誤無きを保しがたいでしょう。」と。涼庭は再診して曰く、「決して誤ってはいない。」と。この人曰く、「もし更に半年を過ぎて死ななければ、先生はその失を何によって償われますか。」と。涼庭曰く、「もし死ななければ、わしの首をさしあげるか、又は、医者をやめよう。この二つを適当にお択び願いたい。」と。この人曰く、「二つとも自分には益がありません。」と。涼庭は「それなら千金をもって盛筵を開き、大いに君らを饗応しよう。」と。この人は承諾した。一座の幇間、芸妓数一〇人、皆その日を指折り数えて待った。更に半年後、妓はなお常のごとくであったが、一夜寝室で急死した。ある人は、初めて涼庭の医技に驚いた。門生が涼庭に問うと、涼庭曰く、「他でもないが、自分が初めて診察した時、その胸中大いに血管の瘤が動いていたので、一年を出ぬうちに必ず破裂するであろうと思った。それが原因で死んだのだ。」と。

涼庭の正妻が肺炎にかかって非常に痩せた。涼庭は三回放血し、毎回の血量は各八〇銭（銭は前出）、しかも病勢は回復の兆しがみえなかった。親友の秋吉雲桂・小石元瑞がこれを見て、「疲労甚だしく、血をとりすぎるから効果がなく、助けることができないでしょう。再び瀉血するのはよくありません。」と。二氏が帰ってから涼庭は門生に「そうではない。数回放血したが皮膚になお潤いがあり、脈膊は元通りである。これは放血量がまだ適当でない証拠である。**語に薬を飲んで瞑眩せぬのは其の病気が瘳っていないのだ。**と言っている。」と。そこでまた放血二五〇銭、病人はめまいせず、ただ気持ちがよくなって、息苦しさや咳がにわかに止んだ。次の日、両氏が来てみてその奇効に驚いた。日ならずして病気は治った。

※の説明

※

藤林泰介（天明一）一七八一～（天保七）一八三六

号は普山・筒城。山城綴喜郡普賢寺に生まれる。寛政八年、京都に出て医学を学び、三伯の**波留麻和解**を購入して帰郷、医事の傍ら翻訳に努力した。後、三伯が京都に来るにおよび、これに師事し、文化六年に京都で開業。

※※

小森玄良（天明二）一七八二～（天保一四）一八四三

号は桃塢、本姓大橋氏、美濃の人。美濃の医師（当時、京都の伏見に移住）小森義晴は玄良の才を見込んで養子とし、玄良は

十歳のとき伏見に移ったが、十四歳のとき郷里の名医、江馬春齢に入門した。玄良は後伏見に帰り、海上随鷗に入門、京都に出て開業、御典医となった。

※※※

小石元瑞（天明四）一七八四～（嘉永二）一八四九

元俊の子、幼時より父の厳格な教育を受け、一時、大槻玄沢の教えを受けた。父の死後その学熟究理堂を受け、京洛の名医として活躍した。元瑞は医家であるとともに、文人墨客とも広く交わった。頼山陽も父が元俊と交わったところから元瑞を頼って京都に来り、その世話になった。

順正書院

順正書院は天保五年（一八三四年）、新宮凉庭先生によって開設された学園で、当時の京都所司代、鯖江藩主・間部詮勝の命名によるものです。

「順正」とは、逆ならず邪ならざるという意味で、人倫の道に従い、邪悪にくみせず正しい道を教える学問所として開設されました。

新宮凉庭先生は、天明七年（一七八七年）に丹後の由良で生まれ、蘭医学や儒教をおさめ、やがて京都で開業。

当時の名医として知られ、幕末の頃、我が国に西洋医学を教えたシーボルトも、その著書の中で新宮先生の人格と手腕を大いに称えています。また、儒学者、理財家としてもさまざまな功績をあげました。

東山南禅寺のほとり、清雅な京風建築庭園を配した順正書院は、やがて花洛名勝図絵によって広く世に紹介されました。名教楽地の石門をくぐれば、果樹が生い繁り、広々とした薬草畑には貴重な薬草が栽培されたといいます。

由良が光り輝いていた時代(3)

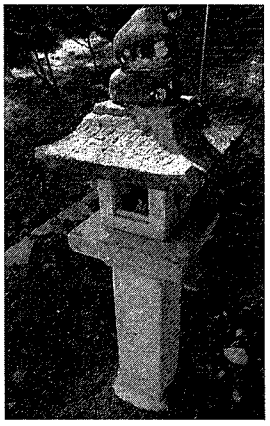
由良の歴史をさぐる会　加藤正一

「資料編　No.3」

神社参拝時に足元に視線を!

参道や石段に敷かれ、濡れると緑色に見える石は由良では産出せず、中世より廻船の最盛期の江戸時代から明治中期まで他所より運ばれて来た石である。

こけが生え滑りやすく参道石として嫌われ、別の石に取り換えられる場合がある緑色の板石。



その他由良で見られる物は仏石、五輪塔、手水鉢、流し台、墓石、燈籠等々である。

この石が何処から来たのか?

公民館だより（第一五六号）の中路神社編で、「石段、参道には福井から廻船で運ばれたであろう笏谷石が敷かれている。」と述べたことについて**笏谷石には種々見解があるので**、このことについて述べたい。

本当に笏谷石か?

笏谷石の一般的な石材としての名称は**緑色凝灰岩**であるが、地質学での名称は火山礫凝灰岩に分類され、**福井県の足羽山周辺で採掘されるもの**を言う。

（足羽山不動尊裏の元石切り場）

福井市周辺に同様の石材として

・福井市西部の**「別畑石」**、

・鯖江市西部の**「和田石」**の存在が知られている。又

・石川県南部の**小松市**の山中から、福井県越前海岸に近い**丹生山地**にまで広がる、新生代第三紀中新世の糸生層の足羽層。

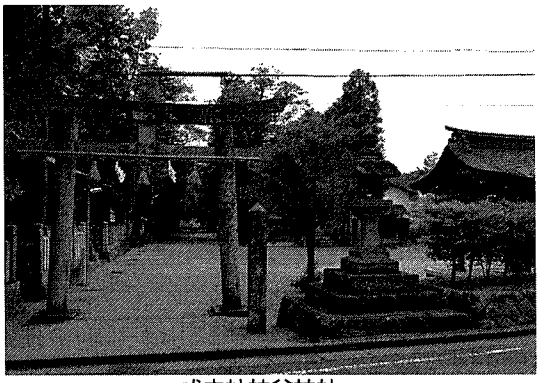
・同じような緑色に見える**高浜町の日引石**（安山岩凝灰岩）

明治十七年「寶求丸」（百九十七石積、七人乗り）が三月から十月までの七ヶ月間に丹後・若狭～出羽・越後間を四往復している、船商い表（舞鶴市史）によると**小浜ら酒田に二・三番下りに板石等の石を運んでいる。（注A）**

これは場所から言って日引石と

考えられる。

・久美浜町の神谷神社、神谷磐座に使われている鳥居、燈籠、敷石、石段に同じような緑石が使われている。（久美浜石?）



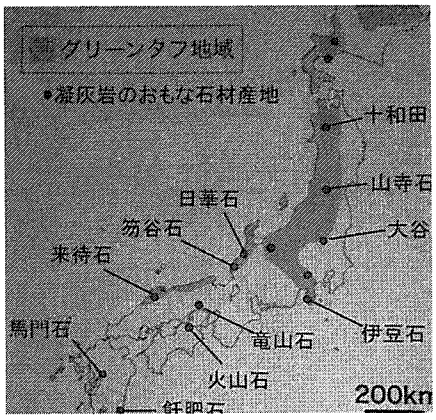
式内社神谷神社
鳥居宝永四（1707）燈籠文政十三年（1830）

・「豊岡の風景の成り立ち」によると、竹野地区の青井浜付近で産出される**青井石**は「凝灰岩系の石で黄色もしくは青色の美しい石です。かつては北前船により全国各地にも運ばれていました。竹野地区では鷹野神社の鳥居や燈籠をはじめ家の土台部分など生活文化の様々な用途に使われています。」と記述されている。

①平成二十八・七・一六　ＮＨＫ
ブラタモリで会津磐梯山の放映の中で緑色の岩壁を緑色凝灰岩と紹介している。

②平成二十八・三・一ＮＨＫ
趣味どきっ！「お城へ行こう」「日本の城を変えた信長の城安土城」で石段の踊り場の敷石を笏谷石と案内の方が説明していた。

このように注目される緑石は（青石）＝緑色凝灰岩（green tuff グリーンタフ）と呼ばれ中国地方の日本海岸側から中部・関東・東北地方に広く分布している。（図



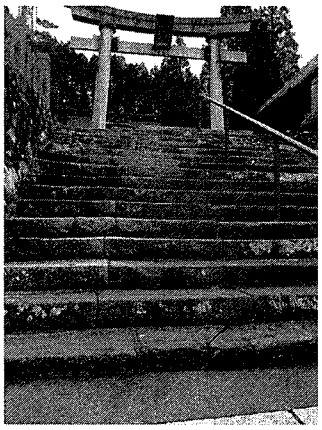
ネット及び久美浜セミナー資料）

（注A）
舞鶴市史・（加藤家文書）によると。明治十七年三月から十月までの七ヶ月間に丹後・若狭～出羽・越後間を四往復して、「下り荷」に両丹の素麺・木綿、若狭の雑貨、敦賀積荷の繰綿などを、上り荷に出羽米を輸送している。添付されている表を見ると、**一番下りの小浜での買仕切りに板石二十九枚、五六石五十本、荒砥石三百挺。三番下り板石八十枚、五六石八十本、諸寄砥石二百挺、一番、四番の下り荷には石が積まれていない。**と言う事はバランサーではなく商品と言う事がわかり、日引石（?）が笏谷石と同じように下り荷として北に運ばれていることがわかる。由良を含め由良川流域神社のほとんど全部の神社に使われている緑色凝灰岩は前述したように各地で産出する。湊から積み出される石には石の名前が書かれていない上に、由良川流域取引記録がまだ見つかっていないため、**これが様々な見解が生じる主原因である。**

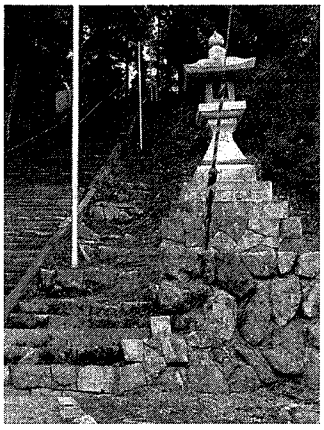
由良川流域の神社にこれらの石が入る可能性

・久美浜石：但馬今子浦「但馬家先祖由来書」（享保四～十一年）（一七一九～一七二六）に享保四年から同九年（一七二四）の六年間に由良村の船頭が操舵する五～八人乗りの廻船九艘が、今子浦へ入津しているがこれらの船は由良村の百姓の持ち船と推測される。（舞鶴市史）などの交易記録がある。

・竹野町の青井石も前述したように北前船で運ばれたとのことによる。


大原神社（福知山三和町）。石段

高倉八幡宮神社（舞鶴市水間）参道


外宮（大江町）石段、参道

笏谷石や日引石、久美浜石、竹野青井石等を北前船、近海廻船で福知山に運ぶとすれば、湊での板石の値段＋船積み込み費

由良までの輸送費

田辺藩「定」

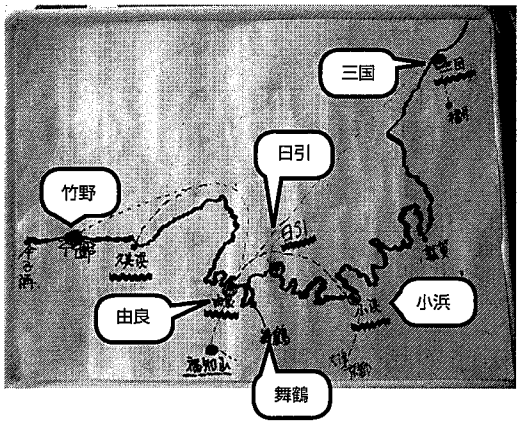
由良川河口で由良舟に積み換え

田辺藩「定」

有路までの輸送費

有路舟に積み換え費

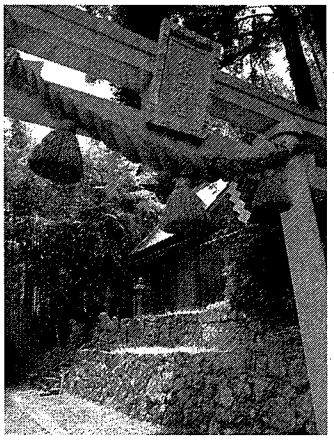
福知山までの輸送費



一般的にみても結構な価格になる事が判る。

久美浜、竹野等の寄港記録は多くは無い。

専門家によれば笏谷石は明治以降に呼ばれたようだが、ブランド名とした**総称「笏谷石」**と、由良の廻船交易から最も近いと考える**高浜町の「日引石」二点について詳しくみると**、日引石が取れる日引地区の隣の宮尾地区の石切り場近くの産霊（うぶすみ）神社（じんじゃ）の参道にも由良川周辺の神社と同じ切り出し寸法、表面の切出し状態の濃緑色の石が敷かれている。見た目、笏谷石か日引石か判断出来ない。この敷石が笏谷石とすると地元に緑色の石があるのにわざわざ加賀の青石（笏谷石）を持ってきて敷くだろうか、緑色に意味があるとしても。普通当然のことながら参道板石として見た目変わらない緑色の地元石を使うのが普通と思う。


宮尾地区　産霊（うぶすみ）神社

日引石採石場跡

この古文書をみると

「乍恐奉願上申候口上之覚」

先年川下寄積登申諸色荷物之義、有路次ニ被為成候而、夫ニ付御運上被為仰付、只今迄指上来候所ニ、中比よりも油良石舟夥敷作出し、積登せ申ニ付、当地之高瀬舟一切働不申候而、段々損シ申候而も、造作可仕助成も無御座、御用等ニ乗廻シ申儀も無覚束様ニ罷成、迷惑ニ奉存候、惣而登り荷物前々之通ニ有路次ニ被為仰付被下候ハハ、難有仕合ニ可奉存候、以上

有路高瀬舟持中

享保二十一年辰四月（1736）

大庄屋吉兵衛殿

「享保十九年（一七三四）の田辺藩の「定」により、他国船の荷物は由良川河口で由良・神崎舟に積み替え、有路では有路舟に積み替えることが決められているにも拘らず、由良、神崎舟は有路で船継せず直接上流まで運んだので、有路の高瀬舟船持ちは大きな影響がでた。有路の高瀬舟船持中が、従来通り上りには有路で船継をするよう大庄屋に求めたものである。」（京都府立郷土資料館「大海原に夢を求めて」より）

●重要な事は「由良石舟は夥しく積登り」これは由良の船が夥しく石を積んで有路より上流に運んだ。と私は読み取る。

●また天明八年（一七八八）を例にとると小浜に入津した米は、蔵米と呼ばれた。丹後・但馬・因幡・石見等西国の米も入津した。丹後の宮津・峯山・田辺各藩の蔵米は、西回り行路（北前船）が盛んに利用されるようになって以降も、恒常的に小浜に入津し大津へと運ばれた。（小浜市史）このことは千八百年代まで小浜に米が運ばれたことになる。

・由良と小浜の間に日引がある。

由良舟が米を小浜に運んだ帰りに、日引石を「帰り荷」にして積んでそのまま由良川上流へ運ぶ事が一番容易と考えられる。古文書に書かれる石は仏石関係のものか神社の敷石関係か分からないが、有路の船持ち達が夥しいとクレームつけるほど多く石が運ばれたと言う事は、一度に大量に運べる小さなもの（一石五輪塔のような仏石）ではないと考えられる。

②「両丹地方史、福知山史談会大槻伸氏によると仏教（カラト）関係のものは福知山地方では日引石が多いのだが両者が混在する。」と記述されている。

③直接福知山まで由良川を遡上でき近海に行ける船の大きさによって越前三国湊へ行けば笏谷石も可能になる。一般的に云われるのは

・五十石船だと田辺、宮津まで、百石船になると三国、但馬に行けると言われている。

由良の川船は四十・五十石

五十石船で小浜まで、米を運んだのはこれらの船で戻り途中の日引で石を積み帰れる。

百石船では三国へ行け、戻りに笏谷石や日引石を積み帰ることは可能となる。しかし前記のように百石船が夥しく三国湊（笏谷石積出港）まで行くことがあったかどうか？（明治元年、神崎の神谷善四郎持ち船（百石？）は三国湊と福知山間で商いをしている記録があるが石の取引記録は無い。）

又由良川の大江より上流は川底が浅くなり浅い所では深さ一～二mであり、福知山まで夥しく遡上するには積荷を少なくし軽くするにしても百石船だと大きすぎて空荷の部分が多く効率が悪い。記録には有路からの高瀬舟の積荷は、上り十五石（2250kg）、下り三十石だったようである。（最大積載は三十石）

効率的には五十石船の方が小浜

に行った戻り船に「帰り荷」として日引石を積み由良川上流まで直行するのが積み換えが無く効率良く費用は安くなる。

前述したように他所船、北前船、又百石船で笏谷石・日引石・他石を運ぶにしては費用がかかりすぎる。五十石船で小浜に米を運んだ「帰り荷」ならついでの為、副業故正式な取引記録が無いのでは？（北海道、東北への三国湊で積んだ石（笏谷石？）の売仕切書はある。）**費用から船の大きさから、小浜へ米を運び「帰り荷」として積んだ日引石の可能性大。**

由良お大師道の石仏の写真を専門家に見せると日引石と判定された。しかし由良神社と如意寺の間の溝で拾った板石の破片や我が家にあった板石の破片を専門家に見てもらったところ笏谷石とのこと。笏谷石の板石が由良に入っている可能性はある。

専門家のつぶやき！

緑色凝灰岩の見分け方として

①経年変化した時の色合い。

②風化の仕方。

③石造物の形状、荘厳さ。

また石に霧吹きで水を吹き付け

①発色の状態。

②製品の仕上げの肌の状態。

③白い部分が含まれている様子

等結局決定的な方法は無いように思われる。これらの見方、方法などを併せて検討して判断。すなわち経験が必要と云う事である。専門家のつぶやきをもととすると、由良脇の船頭邸の敷石、手水鉢は笏谷石。（青色の濃淡により）のように思える。

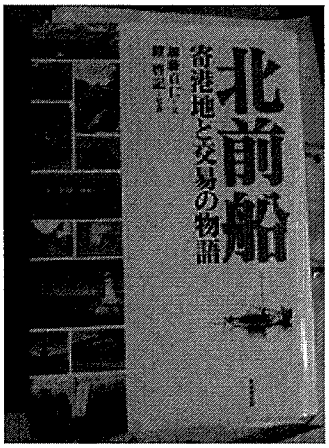
結　論

由良川流域の神社の緑色凝灰岩の全てが笏谷石とは言えない！

状況資料より日引石の可能性の方が大きいが、**現状では取引資料が出てこないと判断が困難？**

他所から運ばれた緑色凝灰岩（グリーンタフ）又は福井の青石というのが正解かも。

★時に由良川流域の神社の参道、石段の緑色の石は**笏谷石**で**北前船のバランサー**として運ばれてきたと言う人がいる。そのもとはどこにあるのだろうか、もしかすると**「北前船　寄港地と交易の物語」（無明舎）？**



抜粋すると「北前船の主要商品は米とニシンだが、奥羽や蝦夷地へ向かう下り船は、必ずと言うほど**石を積んだ。空船では安定が悪いので、バラスト代わり**に船底に積み込んだのである。中でも濡れると青みを帯びる石が大量に運ばれた。笏谷石という。笏谷石は、福井県の九頭竜川河口右岸の三国湊に運ばれ北前船に積まれた。」

三国湊から由良をみると奥羽や蝦夷地へ向かう**下り方向**ではなく、大阪へ向かう**上り方向にあり、奥羽や蝦夷地で米やニシン等を満載して大阪を目指す上り船は安定のためのバラストは不要である。このことからバランサーとして運ばれた石ではない。**

この本にもとづくのであるなら違うことが解る。

下り荷は主に付加価値は高いが比較的軽い物が多く、東北方面の荒波に対応する為に重しとして石を必要としたものがバランサーである。

ただし「製品」としてなら高価なものになっても、価値を求めるなら北前船及び廻船等で上り方面に運ばれることは考えられる。

古代日本史

中西　衛

大和朝廷成立前史の一世紀から三世紀は北九州にあった邪馬台国を中心とする小国連合の時代で卑弥呼が王であった。

この時代は**魏志倭人伝**でわかる。四世紀のはじめごろ大和朝廷は邪馬台国を滅ぼしたようである。それ以降は**古事記**や**日本書紀**からわかる。

北九州を制圧したことにより、大和朝廷は大陸からくる先進文化を独占するようになり、めざましく発展するようになった。

加耶とよばれた朝鮮半島南端部から多量の鉄素材が輸入されたことは、とくに重要であった。それによって朝廷は多くの鉄製の武器と農具を得ることができた。首長たちは朝廷に従えば鉄剣、銅鏡などの祭器や武器をわけてもらえると考え、つぎつぎに朝廷の支配下にはいった。

四世紀なかばには、独自の祭祀の伝統を持つ出雲氏が朝廷に征服された。

朝廷の本拠地は四世紀のごく末に奈良盆地東南部より河内に移した。そして、全長三五〇ｍをこえる巨大な古墳がいくつも作られるようになった。その巨大な古墳を代表するのが全長486メートルの大阪府堺にある仁徳天皇陵古墳（大山古墳）である。雄略天皇㉑を葬ったものである可能性が高い。

『日本書紀』の編成の最大の目的が**天皇制国家の確立**を内外に示すことにあった。

『古事記』では国号を**倭**とし**ヤマト**と読ませている。しかし、**日本書紀**では天皇という言葉が用いられる以前にも、例えば**欠史八代**の天皇の称号や、ヤマトタケルなどの表記までさかのぼって**日本根子**とか**日本武尊（ヤマトタケルノミコト）**の文字を当てている。

日本という国号が最初に用いられた時期については『新唐書』によると三代高宗の咸亨元年（六七〇）に倭国は使を派遣し、「倭の名を悪み、更に日本と号す。使者自らいう、国、日出づる所に近きをもって名となす」とあるから近江の天智㊳朝時代のことになる。

日本と書いて**ひのもと**と読むことがある。このことについては日下（くさか）が生駒山地の麓の地名であり、東北地方に**日本中心**と刻んだ石碑があることから**ひのもと**というのは谷川健一氏の説に従って、旧物部王国の称号だったものを崇神王朝⑩がアマテラスの名前とともに旧王朝から奪って自らの称号としたことを追認したものである。また**天皇**の称号も『記・紀』では初代の**神武天皇**①から用いているのが、それ以前は**おおきみ**と言い**大王**の文字を当てていた。

六〇七年の遣隋使の国書には「東天皇、敬して西皇帝に白す」と記されている。

天皇を神の子孫とする考え方は王位世襲制とともに古くからあったことは間違いない。

生きた天皇を現人神（あらひとがみ）として崇拝する思想が現れたのは、七世紀末近くの**天武天皇**㊵の時代のことと思われる。

今上天皇は一二五代で万世一系で続いてきたが神武①（じんむ）綏靖②（すいぜい）安寧③（あんねい）となり九代の開化⑨まで約四〇〇年間にはこれといったできごとが記述されておらず、（欠史八代）と呼ばれ想像上の人物で実在が疑問視されている。**崇神天皇**⑩（すじん）こそ大和朝廷を開いた始祖王ではないかと考えられている。神武も崇神もハツクニシラススメラミコトという別名を持っている。

西暦前六六〇年（辛酉の年）、推古九年（六〇一年）（辛酉）から逆算された。その一二六〇年前―十干十二支の最小公倍数、つまり六十年を（中国古代の識緯説にもとづいて）二一周さかのぼった過去が神武天皇（六二才）即位、日本紀元の元年とされた。神武天皇が崩御したのが西暦前五八四年―まだ縄文時代晩期であった。在位七六年、年令一二七才（書紀）あるいは一三七才（古事記）畝傍山（うねびやま）東北陵に埋葬されたのが翌年九月十二日。『記・紀』の神武天皇に関する物語は、彼一人の事跡であるかはきわめて疑わしい。しかも時代的にもとうていその記述が正確であるとは考えられない。しかし天皇家の祖先が大和盆地を平定したことは、紛れもない事実である。それゆえに、天皇家が成立したのである。

おそらく、大和盆地平定の事業は、何代にもわたって行われたことであろう。そのような英雄たちの物語が、初代神武天皇に集約されたのである。その意味で、大和盆地平定を果たした祖先として、初代神武天皇が行ったとされるさまざまな行為は、実在したといえるだろう。

はるか時代はくだり、明治二二年、明治天皇は、神武天皇夫妻を祀るため、橿原神宮の建立を命じた。なぜ、現在地を選んだかといえば、かつてここで樫の木の根がたくさん掘り出されたことがあるからだという。さすがに、いくらなんでも気がひけたのか、京都御所の内待所と神嘉殿の建物を、それぞれ、本殿と拝殿として移築させることにした。なんの由緒もない場所に二五〇〇年前の先祖を祀る神社を、でっちあげてしまったのだから、せめて建物だけでも歴史の箔を必要としたのである。二つの建物は国宝になっている。こうして、明治二三年三月二〇日。橿原神宮という宮号が下賜され管幣大社になったのである。

古事記は天武天皇㊵の命によって、稗田阿礼（ひえだのあれ）が伝誦していた帝紀（皇統譜など天皇家の歴史）、旧辞（豪族たちの神話や伝承）を和銅四年（七一一）九月にいたって元明天皇㊸が太安万侶（おおのやすまろ）に筆録を命じ、翌年の和銅五年に完成したものである。現存する最古の歴史書である。**日本書紀**は養老四年（七二〇）に天武天皇の子の舎人親王たちが中心となって編纂した歴史書、**古事記**が和銅五年（七一二）、**日本書紀**が養老四年（七二〇）、八年しか差がない。

日本列島で人間の歴史を進めてきた人々、それが三、四世紀のころには日本民族として、言語や生活様式、文化感覚をだいたい一様にしたものになった。

日本の土地は、北や西、または南方から訪れた種族の混成で開かれてきた所である。日本人の祖先は、すべて外来者だといっていい。外地からの渡来は、日本のうちでそろそろ統一王権が成り立ち、五世紀の応神⑮仁徳⑯王朝がかなりの規模で支配力をふるうに至った段階でも、また六世紀以降でも、極めて多かったと考えられる。

朝鮮方面から渡来した人々により技術、文化が発達し、日本の古代史を大きく発展させた。四世紀から五世紀にわたる間に漢字が伝えられた。中国的思想も五・六世紀にはようやく導入された。六世紀（五五二年または五三八年公伝）に仏像を礼拝する宗教として仏教が認められた。その他陸墓の土木技術が進んだり機織その他の技芸や陶芸の発達など、文化の名に値するどれをとっても、ほとんどが朝鮮方面から渡来した新移住者によって導かれたものばかりだ。私たちの衣食住の様式をも含めて、日本文化の古今をかえりみれば、すべてが外来文化の複合混成である。

西暦四七八年に雄略天皇㉑に相当する「倭王武」が中国の宋

の順帝にもとへ使者をやり、上表文を差し出したと『宋書』の倭国伝にあるが、その文中に「昔より祖禰躬ら甲冑を貫き、山川を跋渉し、寧処（休息）にいとまあらず。東は毛人を征すること五五国、西は衆夷を服すること六六国、渡りて海北を平らぐること九五国」とある。「私のところは、昔から大王自身が甲冑をつけて、各地を休みなくめぐり、それぞれを征服し平定してきた。結果として東は毛人すなわち蝦夷を征すること五五国、西方では、熊襲隼人を服すること六六国に及んでいるし、海の北方韓の地まで進出し九五国も平らげています。」と、まことに大言壮語を並べた。ヤマトの王権を確立するまでに、幾たびも王自身を中心にして東に西に、各地の豪族首長をおさえる兵戦に出陣したとの伝承は、五世紀末の大王家に語られていたのであろう。代々そうした英雄的王者が活躍したという伝えが累積してヤマトタケルの概念が出来た。

景行天皇⑫の皇子小碓命（おうすのみこと）がヤマトタケルであるとなっていて、熊襲征代や蝦夷平定に大活躍をした。

『日本書紀』垂仁天皇⑪七年七月七日の条にある話である。その日、天皇の近侍のものが言うには、「大和の当麻の村にたいそう勇敢で恐るべき男がいます。とにかく力の強いやつで、いつも周囲の連中に、どこを探しても、自分に相撲で勝てるものはあるまい。何とかして自分と生死を賭けて勝負を争う相手がほしいものだ。と言っています。」

すると天皇は「ああその噂ならば、私も聞いている。**当麻蹴速（古音では【くゑはや】）**は天下一の力士だということをほんとにこれと互角に相撲をとるものはいないのかなあ」すると一人の侍臣が進み出て、「私の聞くところでは、出雲の国に勇士がおり、**野見宿禰（のみのすくね）**と言います。彼を召し出して取り組ませてはいかがでしょう。」と言うので即日、出雲から迎えて、その日に蹴速と相撲を取らせたと言う。二人は相対し、激しい蹴り合いになり、ついに宿禰が蹴速の肋骨や腰を折りくじき、殺したことになっている。こうして蹴速の領地はことごとく没収の上、宿禰に与えられ、また、その土地に腰折田と呼ぶ所があるわけだ。

応神天皇⑮は仲哀天皇⑭の第四子で母は神功皇后、北九州で生まれた。畿内の方へ戻ってくる際に忍熊王（おしくまおう）というものが抵抗してその東進を阻んだ。応神天皇（ホンダワケ）は、忍熊王を攻め、琵琶湖畔で殺し、若狭から角鹿（つぬか…今の敦賀）に赴いて、ミソギのために気比神宮に参拝してから、ヤマトに入った。この応神王朝の成立で、畿外の各地域を含めて、ヤマト国家のもとに新たに引き付けられたところが多かった。その支配の拡大は応神天皇陵の広大な規模にもうかがえる。俗に興田（ホンダ）陵と言われるこの陵墓は大阪府羽曳野市内にあり、三段に築かれた前方後円墳で全長四一五メートル、後円部径二六七メートル、後円部の高さ三六メートル、仁徳陵よりも全長でやや劣るが、径や幅は勝る大きさである。

五世紀前期に応神王朝の二代目として**仁徳天皇**⑯が大王の座についた。

天皇ある日、高き御殿にのぼりて、四方をのぞき見たまいしに、「村々より立つかまどの煙の少なきは、五穀実らずして、食物の足らざるためならん。都（難波）近きところすらかくの如くなれば、遠き国々に手は、人々如何に苦しみ居るならん。」とおぼしめし、勅して三年の関税をおさむることを免じたまへり。されば皇居はしだいにあれ損ずれども、御心にもかけたまわず、御衣すら新には、作らしめたまわざりき。そのうち豊年うちつづきて、人民皆豊かにな

り、村々の煙も盛んに立ち上りたれば、天皇これを見たまひて、人民の富めるを喜びたまひ「われすでに富めり」と仰せられたり。こうして三年後には、人民はこの仁政に感激して、荒れた皇居復興の工事に、我先にはせ参じた。

以上の記述は古代貴族社会にとっての帝王学の教材であった。そして、皇国史観の歴史教育にも、わが天子の仁恵のほどはこのようなものとして感銘させる重要教材となっていた。なぜ仁徳天皇を模範的天子像につくりあげたといえば、この大王の前の応神天皇のとき、ヤマトの支配圏は、大和を超えて、まさに日本としてのヤマトをおおうものに拡大した。そのあとをうけて、さらに国際的にも立場を強め内政的にも一段と充実させた時期になったと考えた。

そしてこんな大きな、現代の土木工学の研究によれば、一日千人を使って四年近くの歳月を要すると推定されるほどの大陵墓を実現させた威力ある大王。この人物こそ、古代帝王の理想像であるべきだとの設定があって、後に仁徳とおくり名されるにふさわしく、いろいろの伝承をここに集め、潤色をほどこしたのであろう。

歴代の天皇（大王）のなかで**継体天皇**㉖は極めて特異な存在である。『古事記』も『日本書紀』も継体を品太（ほむだ）天皇（応神天皇）の五世之孫とし、父も祖父も、祖父母も大王（天皇）ではなく、やっと五代前の祖先が大王（天皇）だったというのである。これほど遠い傍系王族が即位した例は、その後の歴史にも皆無である。継体を境に天皇の血統は交代したことになり、万世一系を説く『記・紀』の記述は歴史的に否定されることになる。

推古天皇㉝は最初の女性天皇である。歴代女帝十代のうち、推古天皇から八世紀後半の称徳天皇㊽までは、八代が集中する女帝の世紀である。推古朝の政治は主権を持つ女帝のもと**聖徳太子（厩戸皇子）**と**大臣蘇我馬子**が共同し積極的に進めた。推古天皇一一年（六〇三年）一一月に我が国の冠位制の最初である**冠位十二階**を定めた。翌一二年四月、**十七条の憲法**を作った。二八年（六二〇年）のは天皇紀、国記などの歴史書を編纂した。一五年（六〇七年）七月に**小野妹子**を隋へ派遣した。「日出ずるところの天子、書を日没するところの天子に致す　恙なきや」の国書（『隋所』倭国伝を隋の煬帝（ようだい）へ出した。大化の改新以降、太子に対する信仰は時と共に強まり、奈良時代にも平安時代にも太子の超人性が敬慕されるようになった。そこで飛鳥時代に行われた目覚ましい事蹟を太子の偉業としてしまう。あるいは太子亡きのちの仏教上の業績にしても、時をさかのぼらせて、太子の時代に彼自身がつくったものなのだというに至った。一般的常識として、聖徳太子は推古天皇の皇太子であると共に、摂政として内外各方面の政治改革を断行し、内は天皇中心の統一国家の成立を図り、外は支那との対等外交を確立し、十七条の憲法や冠位十二階を定め、国史を編纂し、仏教を中心とする文化を興隆し、法隆寺、四天王寺を建て、経典を講釈し、三経義疏を撰述した不世出の哲人政治家であり、日本仏教の祖であるように伝えられていますが、批判的に資料を検討し、歴史的に考察いたしますと疑義百出であって、真実の聖徳太子のイメージは容易に描けない。

短歌

枡本　清

夏真っ盛り鎮守の森は蝉しぐれ
ラジオ体操子等と楽しむ

古都の盆夜空に燃える大文字
炎に送られ精霊天に

日帰りのバスに揺られて石山寺
もみじに浮かぶ歴史の古刹

銀盤に再び恋した心の強さ
世界の真央笑顔素敵

年の暮れ湯船の柚を手にとれば
ほのかな香りに冬至楽しむ

チーと知っ得

安寿足湯がオープンして五年八ヶ月になる。高齢者の健康づくりと人々が楽しく交流とふれあいを深め地域の活性化を目的として始まった場所である。

丹後鉄道が、七月から九月までの三ヶ月くろまつ号ランチコースとして丹後由良駅に約四十五分停車して客を足湯と北前船資料館へ案内する企画があった。

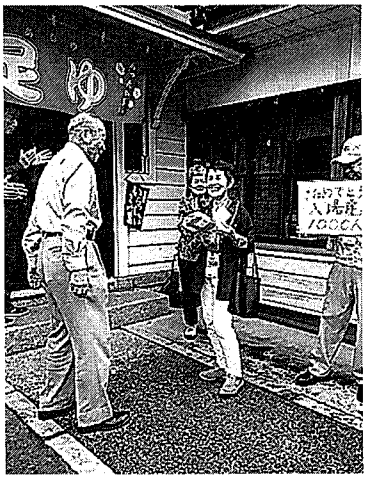
由良の戸千軒長者の館では入館者千人目のお客様に何か粗品でも贈り感謝しようと考えた。千軒と千人の掛け合いである。

去る九月二十三、当日一人二人…と指折り数えて千人目、「お客様あなたが千人目」

皆様一瞬玄関先で立ち止まり、やっと理解され全員で大きな拍手の渦であった。

しかも、そのお客様は由良出身で現在舞鶴にお住まいとのこと。話題で盛り上がった一日である。

丹後鉄道の企画に感謝し、由良地区の活性化に更なる企画を考えて来館者の増加を期待したい。



（飯澤登志朗）

編集後記

2016（H28）十一月

文化庁から興味ある発表がありました。「ら抜き」言葉を使う人が多い傾向にあるそうです。

「国語に関する世論調査」では「今年は初日の出が見れた」「早く出れる？」といった言葉を使う人の割合が初めて、「見られた」「出られる」を使う人を上回りました。特に「見れる」は十代（一六～一九歳）の八割近くが使用していました。

「ら抜き」というのは、可能の助動詞「られる」の「ら」が脱落した状態のことであり、一九九五年の国語審議会で「改まった場での使用は現時点では認知しかねる」とし、「乱れた日本語」とされてきました。

言葉も時代と共に変化していく事を表しています。今回の調査では「絵文字」を使うことのある人が五六％に上ることも分かりました。敬語への意識では「伝統的な美しい日本語として大切のされるべきだ」と答えた人が六四％で「新しい時代にふさわしく、簡単で分かりやすいものであるべき」の二六％を大きく上回りました。九七年の調査ではほぼ同じでした。「美しい日本語」への意識が高まっていることを表しているといえます。

（枝川）